HOKUSEI@COM

2008・AUGUST
vol.6

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE SUMMER EDITION

北星学園大学
北星学園大学短期大学部

02-03
［特集］
プロバスケットボールチーム「レラカムイ北海道」水澤佳寿子さんインタビュー

02-03
北海道のスポーツの未来へ、ホップ・ステップ・ジャンプ!
(株)ファンタジア・エンターテインメント
代表取締役社長 水澤佳寿子さん

04-05
［学生たちの素顔］
北海道洞爺湖サミット
通訳ボランティア・ミッション
世界のいま、地球の未来。サミットを通して考えたこと。

06
［OB&OG インタビュー］
卒業生は、いま。
「江差追分」全国大会優勝
間島 秀格さん
先人たちの思い、農業の未来。大地を舞台に歌い継いでゆく。

07
［先生たちのその素顔］
文学部　江口 均先生
ノンネイティブならではの英語の楽しさを広げたい。

08
［HOKUSEI INFORMATION
北星学園大学からのお知らせ］
ベロタクシー「北星号」発進!
札幌のエコライフをバックアップする自転車タクシーに協賛
☆社会福祉夏季セミナー
☆大学公開講座
☆北星オープンユニバーシティ

［特集］ INTERVIEW

(株)ファンタジア・エンターテインメント
代表取締役社長 水澤佳寿子さんインタビュー

北海道のスポーツの未来へ、ホップ・ステップ・ジャンプ!

いま北海道のスポーツエンターテインメントは元気いっぱい! その一翼を担っているのが、野球・サッカーに続き北海道からプロリーグ入りを果たしたバスケットボールチーム「レラカムイ北海道」です。今回、チーム運営を手がける(株)ファンタジア・エンターテインメントの代表取締役社長・水澤佳寿子さんに本学学生がインタビュー。経営者として、ひとりの女性として、ビジネスウーマンの先輩にお話を伺いました。

観客動員数No.1! レラカムイの魅力の秘密とは?

金澤:私は中学で選手、高校でマネージャーとしてバスケット部に所属していました。今でもレラカムイの試合観戦に行くほどのバスケット・ファンですが、なかなか一般的な人気が定着しなくてやきもきしています。

水澤:バスケットは商品としてのクオリティは高いのに、販売戦略が確立されていなかったスポーツだと思います。バスケット=マイナースポーツ、ルールが難しいといったイメージは、大衆の思い込みに過ぎません。だからレラカムイはバスケットのカッコよさをアピールする仕掛け作りに力を入れました。たとえば選手の上半身裸のポスターなどは大きな話題を呼び、ファンの声に応えて販売に踏み切ったほど。こうしたイメージ戦略の積み重ねが、昨年度の観客動員数リーグNo.1という結果につながったと自負しています。これからもレラカムイをますます盛り上げていきますよ。

黒澤:レラカムイの前にコンサドーレ札幌の取締役も務めていらっしゃったそうですが、スポーツビジネスの魅力とは?

水澤:スポーツとはいえ「いかにファンを増やして売るか」という点では一般のビジネスと同じだと思います。もちろんゲームの勝敗はわからないし、ひょっとして負けが続くかもしれない。でもそこでファンが「もうダメだ」と離れていくのではなく「次こそ勝つかも」と期待し、応援したくなるチームをどう形成していくか——ファン心理をコントロールしながら経営の勝算につなげていく面白さがありますね。

黒澤:ご自身もスポーツの経験がおありですか?

水澤:いいえ、母と息子がバスケットをやっていたので試合は観ていたけれど、私自身はまったく未経験です。でも、野球やサッカーだって観客の大半は未経験者でしょう? 未経験者に対して売り込むのだから、スポーツビジネスに必要なのはスポーツの経験ではなく未経験者としての視点、そして経営のプロとしての判断力。ただ好きなだけではチーム運営は務まりません。だから社員を登用する際にもバスケットとは全く無関係に、ビジネスの各分野のプロを選び抜きました。

金澤:レラカムイは心のこもったファンサービスが印象的です。これも未経験者としての視点から生まれた戦略でしょうか?

水澤:もちろん! 観客のモチベーションを左右する大切な要素です。広いフィールドを使う野球やサッカーはテレビ観戦の楽しみもありますが、コンパクトなコートを駆け巡るバスケットの場合、スピード感や臨場感を間近で感じられるのはアリーナ観戦ならではの魅力。そのリアルな感動をファンサービスでさらに深めてもらうのです。でも最初は、選手自身にファンサービスという発想が根付いていなくて、試合終了後すぐにストレッチを始めてしまったりして、慌てたこともありました。選手にサービス精神を教育し、定着するまで時間はかかったけど、確実にファンの心をつかめたと思いますね。

金澤:確かにそうですね。試合のあとに握手や写真にも気軽に応じてもらえて、ファンとしてはとてもうれしいです!

PROFILE

水澤（みずさわ）　佳寿子（かずこ）

1962年札幌市生まれ。北海道大学大学院 経済学研究科修了
経営学修士（MBA）学位取得。
北星学園女子中学・高等学校、札幌静修短期大学（現札幌国際大学短期大学部）を経てフリーアナウンサーに。
1988年「コティ」を設立、全国規模の育児支援事業を展開する。
2005年「コティ」譲渡後、（株）北海道フットボールクラブ（コンサドーレ札幌）取締役に就任。
2006年「（株）ファンタジア・エンターテインメント」を設立、北海道初のプロバスケットボールチーム「レラカムイ北海道」の運営を手がけている。

文学部
心理・応用コミュニケーション学科
3年 **金澤（かなざわ）　恵理子（えりこ）**
レラカムイのチーム運営の裏話を伺えて、試合を観に行く楽しみがまた増えました。選手と一緒に写真撮影もできて感激！ ますます応援に熱が入りそうです。

文学部
心理・応用コミュニケーション学科
3年 **黒澤（くろさわ）　歩美（あゆみ）**
事前に女性社長と聞いて緊張していたのですが、とても親身に接していただき安心しました。波乱万丈の人生を乗り越えてきた生き方に、同じ女性として憧れます。

思いを行動に変えて、社会に価値あるビジネスを

黒澤：水澤さんは北星女子中・高のご出身だそうですね。

水澤：ええ。当時は「チャペルタイム」というのがあり、毎日讃美歌を歌って聖書を読んでいました。多感な思春期に心の安定をくれる大切な時間でしたね。

金澤：どんな生徒でしたか？

水澤：正義感が強くて弱い者いじめは絶対許さないタイプ。自分の気持ちに妥協せず、相手が先輩でも先生でもはっきりものを言うので、目立っていた方だと思います。中学1年のときに「乳児の養護施設への訪問活動をしたい」と思い立ち、すぐに先生に話し、仲間8人を集めて実現させたこともあります。やりたいことにまっすぐ向かっていく気質は、この6年間に形成されたのかもしれません。

黒澤：水澤さんは若くして起業に乗り出されていらっしゃいますね。

水澤：私、元祖フリーターなんです（笑）。希望していたマスコミへの就職に失敗し、短大卒業後フリーアナウンサーを経て23歳でイベント企画会社を設立。28歳で離婚し、子供3人を育てながら託児保育サービス事業を始め、3年前にその事業を譲渡してコンサドーレ札幌、そしてレラカムイ……ジェットコースターみたいな人生です（笑）。

金澤：私たちとほとんど変わらない年齢で社長に！ 私たちの世代は思っていても行動に移す勇気がなかなか出ないので驚きました。

水澤：どんなに素晴らしいアイデアも、思っているだけではいつまでたっても形になりません。バスケットチーム運営のお話をいただいたときも「野球・サッカーにバスケットが加われば北海道で1年中プロスポーツが楽しめて、たくさんの喜びと経済効果が生まれる」と思ったら、「自分がやらなければ!」という気持ちになったんです。とはいえ新たな事業を始めるときは、つねに薄氷を踏む思いです。選手、スタッフ、たくさんの人々の生活がかかっているのですから。「失敗しても人のせいにしない」、「社会的に意義あるものを生み出していく」をモットーに、経営者としての緻密な計算と大胆な決断を心がけています。ただし、いかにも“女社長”というような肩肘張った感じはイヤなので、女性ならではの視点や雰囲気は大切にしたいですね。

黒澤：お会いするまでとても緊張していたのですが、とてもやさしく気さくに接していただき、同じ女性として憧れます。最後に、社会の先輩から学生に向けてメッセージを――。

水澤：思ったらすぐに行動すること。たとえ失敗しても、やらない後悔よりもやった後悔をしたほうが見える景色が違ってきます。また、学生時代はたくさんの経験をして、たくさんの良き師にめぐり会うチャンスです。一見役に立たないようなこと、就職に直接結びつかない講義の中にも自分を成長させるヒントが必ず潜んでいますから、どうかムダにしないでほしいと思います。

金澤・黒澤：本日はありがとうございました。

学生たちの素顔
Our students: A closer look

～北海道洞爺湖サミット
通訳ボランティア・ミッション～

世界のいま、地球の未来。サミットを通して考えたこと。

去る7月に開催された北海道洞爺湖サミット。
それを通訳ボランティアという形で影から支えていた学生たちがいます。
ミッションは、新千歳空港内での外国人向け英語ガイド。
世界のG8が集結した国際会議を得意の英語でサポートした
通訳ボランティア総勢92名、北星学園大学から38名、
そのうちの5名が集まり、一生に一度の貴重な体験を振り返って
語り合う“アフターサミット”を開催しました。

文学部
英文学科3年 武田 愛美（たけだ めぐみ）さん

文学部
英文学科3年 橘 明日香（たちばな あすか）さん

文学部
英文学科3年 島村 緑（しまむら みどり）さん

文学部
英文学科3年 皆川 敬太（みながわ けいた）さん

経済学部
経済法学科4年 高島 悠（たかしま ゆう）さん

英語力とおもてなしの心に磨きをかけて

――まず、みなさんが通訳ボランティアに応募した動機からお聞かせください。

高島：北海道で開催されるサミットに学生として関われるなんて、人生でめったにないチャンスだと思って応募しました。でもぼくは経済法学科なので英語は独学。不安もありましたが、周囲に助けられながら務めを果たすことができました。

島村：北海道でサミットなんて、たぶん生きている間には二度とないでしょうからね（笑）。私は英語力を試すことはもちろん、他大学の人との交流も大きな目的でした。実際いろいろな大学の人と話すことができたけど、北星の学生がいちばん多かったみたい。

皆川：ぼくも英語を生かすチャンスだと思って友人と一緒に参加したところ、学生ボランティアの半分以上が北星の学生だったそうで、北星オリジナルのリストバンドやバンダナをつけた人がたくさんいて心強かったですね。

橘：私は昨年2月のノルディックスキー世界選手権大会に続き、通訳ボランティアは2回目。学生やシニアボランティアなどいろいろな世代の人と知り合えるのも楽しみでした。

武田：私も橘さんと同じく2回目。ノルディックのときに自分の英語の未熟さを痛感したので、どれだけ英語力がアップしたか試してみたいという気持ちがありました。実際は外国人よりも日本人観光客に話しかけられることのほうが多かったのですが……。

高島：ぼくは日本人観光客でも困っている素振りの人がいたら、自分から話しかけるようにしていたよ。外国人観光客に携帯電話やカートの貸出場所、両替所などを質問されることも多かったな。

橘：私と武田さんはフライトの合間に外国人の職員の方に「試しに英語で道案内をしてごらん」と言われたよね。

武田：あれがいちばん大変だったね（笑）。空港内のマップやアクセスルートなどがうろ覚えだとすぐに言葉が出てこなくて。

皆川：ぼくはフランス人のプレスに日本語で「空港ではどんな食事ができますか?」と尋ねられたよ。

橘：なんて答えたの?

皆川：「牛丼とかカレーとか……」と言ったらフランス人が「ああ、ご飯ものね」と。（一同爆笑）

道民としての責任と、ボランティアとしての喜びと

島村：私も外国人プレスより観光客の対応のほうが多かったな。控室でタンザニアの外交官とお話できたのはラッキーだったけど。空港全体が厳戒態勢だったから、プレスの人々は気軽に話しかけにくかったのかもしれないね。

高島：その一方で、案内板や椅子などがリサイクルできるダンボール製だったり、“環境サミット”らしい配慮もあったね。

橘：ゴミの分別も徹底されていたし。

武田：北海道らしいおもてなしもよく考えられていたと思う。配布されたお弁当に北海道産のお米や卵、鶏肉などが使われていたり、北海道を世界に向けてPRしていただくことを目的にした取材用無料パス(PASS)「ようこそ！北海道パス」も発行されていたよね。

島村：私は初めてのボランティアですべてがいい経験になったけれど、自分が北海道のことをあまり知らないことを実感……。

皆川：ぼくも同感。北海道の旬の食べものや歴史などについて観光客から質問されて、すぐに答えられなくて困った。北海道はもちろん日本についても、住む人間としてもっと知っておかなければと思ったね。

武田：現場では通訳そのものの仕事はあまり多くなかったけど、シニアリーダーの方から社会人としての経験談を聞く機会もあったし、やはり今回参加してよかったと思う。

皆川：ぼくは今回、もし通訳という立場でなかったとしてもボランティアに参加したと思う。ただ、一方的な善意の押しつけは本来のボランティアのあり方ではないと感じていたので、「求められることに対して自分が持ちうる能力で応える」という形で参加できたことはとてもうれしかったな。

島村：私も「喜んでもらえる喜び」を初めて味わった。また機会があればボランティアに参加するつもり！

地球のために、学生としてできること

――“環境サミット”にボランティアとして参加したみなさんの、環境に対する意識についてお聞かせください。

皆川：サミットでは環境問題や食糧問題が議論された一方で、開催のために膨大なコストがかかりました。国民一人ひとりの意識喚起も大切だけど、国家レベルでコスト削減に配慮した会議を実現し、浮いたお金を問題解決のために使えないものかと思いました。

橘：サミットではマニュアルブックなど紙資源が大量に使われているのも気になったな。個人的にはマイバッグを持つようにしているけど。

ハンドブックには北海道に関する情報がぎっしり

サミット会議場となったザ・ウィンザーホテル洞爺

島村：私は7月7日のガイアナイトに合わせて自宅の電気を消すよう母に頼んだの。一人ひとりの行動が大切だと思うので。

高島：レジ袋をもらわないとか、学食で割り箸を使わないとか、ぼくたちができることもたくさんあるものね。

皆川：北星の学食では、割り箸を使う学生は少ないように思う。使っていない教室の電気もこまめに消されているし、ゴミの分別もきちんとしている。

武田：冷暖房の温度調節など、ほかにもできることはまだまだありそう。

橘：これだけ学生の意識が高いのだから、“エコ大学”をめざせるかも(笑)？

皆川：学生の立場から起こせるアクションがあるはず。日々の行動を通して自分の考えを周囲に伝えて、共感の輪を広げていく。そして自分が親になったとき、子供たちへ伝えていく――そんなふうに受け継いでいくエコの輪が、やがて大きなムーブメントに発展していけば、地球だって変われると思う。「自分ひとりくらいいいや」ではなく、「まず自分から始めること」が大事だね。

お揃いのTシャツとリストバンドはボランティア仲間の証。一生の思い出になりそうです。

OB & OG Interview

卒業生は、いま。

先人たちの思い、農業の未来。大地を舞台に歌い継いでゆく。

2007年江差追分全国大会で見事優勝。
長年の努力が実った瞬間だった。

今回の卒業生は、長沼町で農業を営む間島さん。
彼は昨年、「江差追分」全国大会で
日本一の栄冠に輝くという快挙を成し遂げました。
のどかな田園風景をバックに、
その日本一の歌声が生まれたルーツを伺います。

農業
間島（まじま）　秀格（ひでよし）さん
1999年3月　北星学園大学経済学部経済学科卒業

「農家直送」の安心にこだわって

北星学園大学のある大谷地から車で20分も走ると、札幌の喧騒が嘘のようにのどかな田園風景が広がります。ここ長沼町で曾祖父から続く農家の4代目、間島秀格さん。父の跡を継いで、現在は米を中心に小麦・大豆・ビートを栽培しています。20ヘクタールもの広大な農地をひとりで管理している間島さん、農機を操る手つきも慣れたものですが**「昔は家業を継ぐつもりは全くありませんでした」**と笑います。本学で経済学を学び、洗剤メーカーに入社。会社員として多忙な毎日を過ごす中で、趣味や日々の暮らしを大切にしたいと考えるようになったそうです。

—「サラリーマン時代とは違って、農業は自己責任・自己完結の世界。リスクもあるけど、努力した結果が見える分だけやりがいがある。すべて自分で手がける仕事のほうが向いているという自覚もありました。農業とはいえ、売り上げや原価、経費の計算など、すべて一人でしなければならないので、そのへんは企業経営と同じ。大学で学んだことは今でも役に立っています」。

毎朝天気図を見ながらその日の作業範囲やスケジュールを決め、夕方からは米の小売契約先への配達に奔走し、農繁期には手伝いスタッフとともに田植えや収穫に明け暮れる——タイムレコーダーがない代わりに、人智の及ばぬ自然の摂理がある。営業ノルマがない代わりに、“間島さんちのお米”を待っている人々がいる。

—「食の問題が取り沙汰される昨今だからこそ、安心して食べられる米をお届けすることの意義と責任を実感します。最近はネット通販に乗り出す農家も増えているけど、ぼくは農家直送ならではの“顔が見える安心”にこだわっていきたいですね」。

大地に響く、日本一の江差追分

農業離れが進む長沼町で数少ない農業後継者として奮闘する間島さんには、もうひとつの顔があります。2007年、間島さんは北海道遺産にも指定されている民謡「江差追分」の日本一に輝きました。父の影響で2歳半から民謡を習い、14歳から「江差追分」の道へ。しかし中学・高校時代は歌よりバスケットや陸上に熱中。大学に進学し、札幌の師匠に入門して考えが変わったのだとか。

—「それまでは歌の背景も歴史も知らず、ただ歌っているだけでした。でも、わずか27文字の歌詞に北国の自然の厳しさ、北前船の故郷を思う悲しみなどが込められていることを知り、その奥深さにショックを受けました」。

学業の傍ら師匠のもとに通い、農作業を手伝いながら歌い続けた学生時代。会社員から農家への転身も**「自由に歌える環境がほしいという気持ちもありました」。**

江差追分日本一という最高の栄誉を手にした今も、そしてこれからも、間島さんは歌い続けます。

—「何度歌っても同じ歌は二度と歌えない。難しいからこそ手応えがある。長い間歌い継がれてきた歌を通して先人たちに近づきたい、北海道の礎（いしずえ）を築いた人々の思いを伝えたいと思っています」と間島さん。その思いは、農業を受け継ぐ者としての思いにも重なるものかもしれません。

小麦の実り具合を確かめる間島さん。
その手つきもまなざしも愛おしげ。

「米は日本の食文化の中心。
もっと食べてもらいたいですね」と
間島さん。

Featured Faculty Member

先生たちのその素顔

●文学部　江口 均先生●

ノンネイティブならではの英語の楽しさを広げたい。

PROFILE

江口（えぐち）　均（ひとし）

1969年　4月	佐賀県生まれ。
1980年　8月	少年野球で全国大会出場
1988年　3月	佐賀県立神埼高等学校卒業
1993年　3月	明治大学文学部文学科 英米文学専攻卒業
1994年度 ～1995年度	ロータリー財団国際親善奨学金を得て 米国インディアナ大学大学院へ留学
1996年　5月	同大学大学院修士課程 （応用言語学及び英語教授法／ Applied Linguistics & TESOL）修了
1996年　8月 ～1997年7月	韓国全南大学校言語教育院 講師
2004年　4月 ～2006年3月	東北文化学園大学総合政策学部 専任講師
2006年　4月	北星学園大学文学部専任講師

通訳ボランティアとして北海道洞爺湖サミットに参加

北海道洞爺湖サミット開催に伴い、海外から新千歳空港に到着する外国人の移動案内をする通訳ボランティアを本学の学生40名あまりと務め、昨日無事にその役目を終えました。ボランティア活動中は非常に警備が厳しく、世界各国から集まる様々な立場の団体との対応に直面するなど、華やかな国際会議の裏側に張りつめる緊迫感に、学生たちは少なからずショックを受けていたようです。そういう面も含めて国際社会の一端を知ることができたのはいい経験だったと思います。手前味噌ですが、本学の学生たちは実に積極的に動いてくれました。作業を進めていく中で改善点がいろいろ出てきたのですが、学生が的確な判断で対応してくれて頼もしかったですね。最初はおどおどしていたものの、自分の英語力を試す機会を得て自信をつけ、堂々と仕事をこなしていく成長ぶりには目を見張るものがありました。

英語の楽しさに開眼したアメリカ留学体験

私の授業はすべて英語で行います。中には「先生は外国人で日本語が話せないと思っていた」という学生がいるくらい（笑）。学生は最初のうちは戸惑いますが、間違えてもどんどんしゃべっていくうちに、自発的に英語で話すようになります。研究室に遊びに来て英語で話し始める学生もいるほど。英語で話すことが楽しくなってくるんですね。この感覚は私自身もよくわかります。大学時代、あまり英語ができないままアメリカ・インディアナ大学に短期留学したのですが、2ヵ月後に帰国する際、空港で聞いた英語がすべて理解できるようになっていたんです。それで英語が面白くなって、2年後にインディアナ大学大学院へ再留学。妻とはその留学中に知り合いまして、その意味でもインディアナ大学は人生を決定づけた場所だったわけです（笑）。

ノンネイティブの“使える英語”上達の秘訣とは？

その後、韓国・光州へ英語及び日本語の教師として赴任。韓国語はすべて音をカタカナで書き出して覚えました。英語も同じで、音で覚えるのが一番の上達法です。「単語を繰り返し書いて覚える」というのは伝統的な方法ですが、効果的ではありません。「会話」は単語と文法だけではなく、発音はもちろん相手との関係や感情、文化的背景などさまざまな要素が総合されて成り立つもの。そこで私は授業に演劇創作を取り入れ、コミュニケーションや感情表現を通じた英語習得法を実践しています。最近は「英語を話すならネイティブ・イングリッシュ」という風潮がありますが、ネイティブではないからこそできる楽しい学習法や使える表現があるのです。10月のオープンユニバーシティ（市民向け講座）では英語教員に向けた文法教育法を講義する予定ですが、ノンネイティブならではのやさしく実用的な英語教育法を伝えたいと思っています。

野球部のエースとして甲子園をめざしていた高校時代。実は大学でも野球部の監督になるために教員免許を取るのが目標だったとか。

厨房でのアルバイト経験もある江口先生、料理はお手のもの。写真の「水を使わないカレー」と「ベーコンサラダ」は学生に振る舞って大好評でした。

HOKUSEI INFORMATION 北星学園大学からのお知らせ

SEMINAR

格差社会を救う所得保障政策の実態と課題

第41回　北星学園大学社会福祉夏季セミナー

貧困・低所得問題への支援 ～格差社会に何が必要か？～

高齢・児童・障害など社会福祉の領域を超えて広がる貧困・低所得問題。北海道における貧困・低所得問題への支援や取り組みの実態を明らかにし、今後の課題を検討するセミナーです。

- ●日　　程／8月28日(木)
- ●会　　場／北星学園大学内教室
- ●定　　員／140名(定員になり次第締め切ります)
- ●参加対象者／社会福祉に関心をお持ちの方
- ●受　講　料／2,000円(学生1,000円)
- ●申 込 締 切／8月19日(火)必着(申込書及び受講料入金)

本学のホームページでご案内中です。

※写真は昨年行われたセミナーの様子です。

OPEN CLASSES

安全で豊かな生活を創造するために

第34回　北星学園大学公開講座

生活の安全点検と潤い創出 ～時代のキーワードは「生活」にあり～

食品偽装からオレオレ詐欺、家族内の虐待やDVまで、生活にひそむ危機の原因と対応策とは？そして生活に潤いを創造するヒントとは？「生活」に焦点をあてる講義です。

- ●講　　師／森田 紀子　(北海道立消費生活センター相談員／本学卒業生)
  小野寺 淳子(旅行ジャーナリスト／本学卒業生)
  ほか本学短期大学部生活創造学科教授など
- ●日　　程／9月19日(金)～10月24日(金)18:20～19:50(全6回・毎週金曜日)
- ●会　　場／北星学園大学内教室
- ●定　　員／200名(定員になり次第締め切ります)
- ●受 講 料／一般2,000円、大学生・高校生1,000円(全期間セット)
- ●申込締切／9月5日(金)必着(申込書及び受講料入金)

本学のホームページでご案内中です。

※写真は昨年行われた公開講座の様子です。

OPEN UNIVERSITY

新たな世界が広がる、社会に開かれたオープン講座

北星オープンユニバーシティ

語学や資格取得の生涯学習を通じ、人材育成、交流の場を提供

社会人、卒業生に在学生も交えた生涯学習の機会として多彩な講座を開講しています。後期は10月15日(水)より、新規12講座を含め54講座の開講を予定していますので、ぜひ受講してください。

- ●申込期間／9月2日(火)～9月20日(土)
- ●募集講座／「語学」「資格取得対策」「文化教養」
  「ビジネス・社会連携」「キリスト教学」など
- ●申込方法／募集講座の詳細は8月下旬にホームページでご案内します。
  ※ホームページアドレス
  本学のホームページ (http://www.hokusei.ac.jp)から
  「オープンユニバーシティ」をクリックするか、
  http://www.open.hokusei.ac.jpへ
  直接アクセスしてください。
  ホームページをご覧いただけない場合は、
  お電話で案内書(無料送付) をご請求ください。

※写真は昨年行われた講座の様子です。

TOPICS

地球にやさしい交通手段

ベロタクシー「北星号」発進！

札幌のエコライフをバックアップする自転車タクシーに協賛

4月26日、排気ガスを出さない自転車タクシー「ベロタクシー」5台が札幌に初登場。その中に本学のロゴが描かれた「北星号」がお目見えしました。スクールカラーの青をベースに校章や星がちりばめられたデザインが目を引きます。買い物の荷物が増えたり歩き疲れたときに、気軽に利用してみてはいかがでしょう。

- ●運行範囲／テレビ塔を中心とした半径2km圏内
- ●運行時間／10:00～日没まで
- ●乗車料金／1人につき初乗り300円で500mまで、
  以降100mごとに50円加算(子供は半額)

各セミナー、講座、オープンユニバーシティ
お申込み・お問合せ先

北星学園大学 エクステンション課 (C館1階)　Tel.011-891-2731(代表)　Fax.011-896-8311(直通)

Hokusei Gakuen University
北星学園大学
北星学園大学短期大学部

発行／広報委員会
〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号
TEL　011-891-2731(代表)
URL　http://www.hokusei.ac.jp
E-mail　kikaku@hokusei.ac.jp

【広報誌「HOKUSEI@COM」】
タイトルの「COM」は「COMMUNITY(地域社会)」「COMMUNICATION (コミュニケーション)」の頭3文字を取ったもので、本誌が北星学園大学と地域のみなさまを結ぶ架け橋となるように、との願いをこめたネーミングです。

PRINTED WITH SOY INK